

全国大学書道学会プロジェクト

「初期の学会活動」第一回座談会

日時…平成二十七年八月七日（金）午後一時二十分～午後三時

会場…東京八重洲ホール（東京都中央区日本橋三・四・十三 新第一ビル）

東 本日はお集まり頂きありがとうございます。ただいまから、全国大学書道学会プロジェクト「初期の学会活動について」の座談会を開催させていただきます。座談会と言っても、古い時代の活動は私どもは存じませんので、浦野先生のお話を中心に聞かせて頂くということになります。浦野先生どうぞよろしく願っています。

浦野 どうぞよろしく願っています。

東 最初に簡単に自己紹介をお願いします。

小川 淑徳大学の小川と申します。

どうぞよろしく願っています。

見城 静岡大学の見城正訓と申します。

どうぞよろしく願っています。

徳泉 早稲田大学博士課程の徳泉さ

ちです。どうぞよろしく願っています。

石井 石井です。全国大学書道学会

では小川先生と一緒に常任理事です。

よろしく願っています。

杉山 鎌倉女子大学の杉山と申しま

す。どうぞよろしく願っています。

東 そして今回の進行役を務めます、愛媛大学の東です。よろしく願っています。

一、座談会までの経緯

東 簡単に、本日の予定と座談会を開催するまでの経緯について説明させていただきます。この企画は昨年あたりから動きだしましたが、みなさんの中に学会の過去の歴史を調べてみるもわからないという声がかなりありまして、いちばん問題意識を持っておられたのが、今日ご参加の石井先生です。古い開催の年度から遡って、今日お手元にお配りしている資料を作り始めましたが、開催地等が分かりませんでした。そこで浦野先生にお話をしましたら、「私の所に資料がありますので捜してみましよう。」ということをおっしゃって頂き、資料の発掘が始まったのが昨年です。浦野先生の大学に何度かおうかがいして、資料を見るうちに、完全ではありませんが、だんだんと明らかになってきました。それで、学会発表や総会の記録も明らかにできてきましたので、それらの記録も残して、座談会を開催して学会の歴史を振り返りたいと考えました。

また、本日もお集まり頂いた先生方は、四十代以前の若い世代の方々を中心に集まり頂いておりますが、浦野先生からお話をお伺いしてそれを後世に引き継ごうという目的も含んでいます。今日のテーマは「昭和四十年から昭和五十年代までの学会活動について」としてあります。後ほど紹介いたしますが、浦野先生は全国大学書道学会の事務局を永く務められていました。実際は六十一年くらいまで務められていたのですが、横浜大会の都合もあって、五十年代末で切り、今回は古い時代のお話を伺いながら、どういう活動をしていたのかを確認していきたいと思っております。私から浦野先生に質問をさせて頂く形で、当時の学会の状況を浮かびあがらせて行こうと考えています。



二. 現在までの調査の概要

東 今回お配りした資料ですが、「初期の学会について」という資料、「過去の学会開催地」、今年（平成二十七年）で五十七回になります。色分けしている部分が、浦野先生が学会事務局に関わっていた部分です。浦野先生が上京されたのが昭和三十九年だそうです。そして、「特記事項」として学会誌から重要と思われる事項を抜き出しました。そして資料の四枚目をご覧下さい。浦野先生の上京から『書学』の編集の関わりについてごく簡単ですが、まとめております。『書学』という雑誌、これは今でも刊行されていますが、これの編集に昭和四十年から参画されています。四十一年の第八回大会を取材参加されたのが、おそらく初参加になるだろうというお話です。そして昭和四十二年、和歌山大会に参加し、昭和四十三年に事務局を担当されていた東京学芸大学の鈴木竹影先生が急逝されたので、浦野先生が事務局を担当されることになり、昭和四十八年から中央幹事となり事務局を担当されたということです。これと学会一覧の年代表をあわせて頂きますと、先生と学会の関わりのあるところが分かると思います。今日は、このあたりのことを浦野先生におうかがいさせて頂ければと思います。

次に昭和三十四年から、正確には昭和三十三年からについて説明させていただきます。資料の二枚目をご覧ください。全国大学書道学会の記録がいつからあるかはわかりませんが、『書学』によりまずと、昭和三十三年の『書学』に熊本大会の特集記事があります。これがいちはん最初です。皆様ご存じの日本教育大学協会第二部会書道教育部門という組織があるのですが、昔は通称「二部会」と言われていました。その二部会と表裏一体の関係として学会を組織するということがありました。名称は最初から全国大学書道学会とし、会員は、大学教官、附属学

校の教官、私立大学の担当教官とするという原案が立てられていました。会の柱としては三つありまして、研究発表会、書道作品展覧会、講演会です。設立にあたって、特別準備委員というものが作られて、規約等を作るという形になっていたことがわかりました。

昭和三十四年の京都大会、これが第一回の大会になります。展覧会は既に始まっていますので、作品の写真と総会の特集記事が『書学』に載せてあります。ここで規約が決まります。

第一条に事務局を岩崎書店に置くとあります。岩崎書店は出版社ですが、その社長が書道学会のサポート役をしてくださったということが分かりました。それから第四条として、書道の研究発表、諸問題の討議、講演会と展覧会、文部省との連絡という事業が書かれています。

それから、本学会の発足日ですが、ここに明示しております附則の二項に「本規約は昭和三十四年六月十一日から施行する」とあります。今の記録を見ますと、六月十二日となっております。ですから皆さんそれに引つ張られて、私も最近までそう思っていたのですが、大会が開かれたのが六月十一日ですので、正確には六月十一日から発足ということだと思います。

そして昭和三十五年の第二回の岩手大会ですが、今日の資料の表紙に取り上げました写真があり、非常に貴重な記録になっています。岩手大会で幹事長が田邊先生から石橋先生になったという記録がありました。

もう一つ、以前は『書学』の中身をそのまま利用していわゆる学会の研究誌というものを作っていました。この冊子は浦野先生が編集されていた一冊ですが、『全国大学書道学会研究報告』というものです。開けると『書学』とほぼ同じような形です。古い先生はご覧になったことがあると思いますが、ワープロで編集するまでとっていた形がこのようになっていきます。中身を利用して表紙を変えて発行しており、教大協書道部門会の報告を含めて印刷されています。

三. 浦野先生が学会事務局担当となった経緯について

東 それでは、浦野先生に話をうかがうということにしたいと思いますが、座談会ですので、何かわからないことがあったら、そのつど質問して頂ければと思います。それでは浦野先生よろしくお願いいたします。浦野先生が書道学会の事務局を引き受けられた経緯について、今、簡単に鈴木先生のことには触れたのですが、少し膨らませてお話を頂ければと思います。



浦野 整理してくれたデータに「四十三年鈴木竹影先生が死去された」と書いてあるのですが、それをきっかけに引き受けることになりました。というのは、このころ私は二松学舎大学の助手でした。四十三年より数年前に鈴木竹影先生が東京学芸大学を定年退官されて二松学舎の教授になっておられた。そういうことで竹影先生が学芸大学から学会の事務書類を二松学舎に持って来られて、二松学舎の研究室で処理されていた。当時の二松学舎の書道研究室は、一人一人の教員用ではなくて、書道の教員全員で共用する大きい部屋だったのです。その部屋に石橋厚水先生、鈴木竹影先生、金子清超先生と私が机を並べていたのです。ところが四十三年の四月三日、この日は石橋先生の財団法人日本書道教育学会が定例の総会をやる日ですが、

この年は、珍しく都立九段高校を借りてやりました。鈴木竹影先生もこの総会に参加されていたのです。私は、『書学』の編集をしていたので、そこにおりました。お昼ちょっと手前に竹影先生が総会会場から出られて、九段高校の玄関にある電話ボックスに行つて電話されていました。どうも具合が悪かったようです。それを私は雑用しながら見ていた

のですが、それから何分かってひよっと廊下に出てみたら、電話ボックスの外に鈴木先生が倒れていた。それで、すぐに石橋先生にも知らせて、救急車を呼んだという状況だったのです。そしてそのまま回復されなかった、という経緯があつて、……以降は二松学舎にあつた事務書類を私が引きついでやつていくことになった、そういう状況です。

東 ありがとうございます。その事務書類というのが、今から言えば非常に簡単なものだったということでしたね。

浦野 はい、書類箱、丁度半紙をいれるような箱、一箱しかなくて、その中に学会の住所印、印を押す印台と角印とあとはメモを記したノート一冊と会員名簿、それしかなかった。

東 実は今こういう形で発掘されてきたのですが、昭和四十四年の四月一日から浦野先生の会計記録簿があります。見ていただきたいのは、中に私学会館の伝票があります。

浦野 私学会館を幹事の会合等でよく使うようになったのは、その頃からののです。というのは、私学の会員が使うと割引が受けられるのです。

石井 場所は今のところですか。

浦野 同じです。

石井 アルカディアがある場所ですね。(注：後年「アルカディア市ヶ谷」という名称になりました。)

東 今回の座談会もそこを使う候補にしていました。

四. 全国大学書道学会と教大協二部会書道部門の関係について

東 では二番目の質問です。先ほど少し触れましたが、教大協二部会の書道部門と学会の関係について、今度は続木先生との関係が出てくると思うのですが、このことについてお話し頂ければと思います。

浦野 はい。さきほど東さんの説明にもあつたのですが、全国大学書道

学会というのは、教大協二部会書道部門会が先に発足していて、その会が徐々に会員が退官してゆく。当時から既に書道教員の補充はそう簡単ではなかった。せっかくなを動かしてきたベテラン達が徐々に抜けてゆき、会がだんだん萎縮しかねないということも予想され、退官した人も残ってみんなと一緒にやれるような会として大学書道学会という別組織を作って形を整え、みんなで協力しあってやって行こうという意志が設立の時に働いていたと思います。そのために最初の規定案にも国立大学の教官と附属学校の教官と私大の教員と書いてある。OB達は当時から国立を退官すると私大に行く人がほとんどだったので、私大も会員に含めればみんなできるといふ配慮だと思います。

そういうことで大学書道学会がスタートしたのですが、スタートからしばらくの間は、続木先生と鈴木竹影先生の二人が東京学芸大という同じ大学に勤めていて、二人でやっていたのだけれど、竹影先生が退官されて二松学舎に移って、お亡くなりになって私が引き継いだという状況になったので、今度は私が幹事の会合に参加させてもらって、二部会の事務的な仕事と学会の仕事とを連絡調整するということが必要になった。

幹事の会には、伊東参州先生も参加されました。二つの会の事務的な連絡調整をする相手として続木先生との仕事が毎年続いていくということになりました。

石井 そうすると当時、二部会の方の事務を担当されていたのが続木先生という理解でよろしいでしょうか。

浦野 そういうことです。

石井 私は国立大学の教員ですので、二部会についてはすんなりわかるのですが、やはり私立大学で仕事をされている方は、二部会自体がなかなかイメージしにくい部分もある、その辺を少し補足的なご説明をお願い



石井先生

いしてもよろしいですか。具体的には、当時の二部会は国立大学のみの組織なのでね。私立の先生方はそれには参画できないわけですね。浦野 この当時は国立のOBだから、そのあたりはあまり意識しないです。いっしょにやればいいやという感じだったので。ただ、会費が別になっていて、事務局も担当が別になっているので、二つ事務局があった形になっているのです。

これが何年か経つと、様子が変わってきて、何年だったかは覚えていませんが、当時は幹事長制だったので中央幹事会で、規約上は私大の教員も参加できるようになっているし、今の状態で国立の教員とOBだけで組織していたのでは、会員数が四十人前後で動かない、発展しようがない。これまで国立大学に関係のない私大の先生方にも呼びかけて学会としての規模拡大をはかったらどうかという議論に進んだのです。

東 『書学』の記録をみても、いつ頃からその話が始まったのかということがわからないのですが。

浦野 それがおかしいとは思っていません。

東 前の記録を見ると、教大協二部会だけの会が七回あるのですが、東京大会から始まって、熊本大会まで。熊本大会で話がでているので、その前の千葉大会では既にその話は出ていただろうと推定することはできるのです。それほど古くから話がでていたのではないと思います。

浦野 始まりはわからないけれど、さっき言ったように、そもその趣旨はOB取り込みにあつたと思います。それは私が関係しながら、そういう意図であつたなと感じていました。

石井 そうすると、作って頂いた網掛けの部分が二部会として行われていた部分としてあつたのですね。

浦野 二部会だけしかなかった時代です。

東 二部会という名称は、いつ頃まで使用されているのですか。

浦野 今でも。

石井 今でも使っています。

東 失礼しました(笑)。

浦野 今でも二部会は三日間の初日にやっている。

東 教大協とは言わないんですね。

石井 古くからの先生はよくお使いになる。

小川先生



小川 三頁に昭和三十五年の第二回岩手大会のことが書いてあるのですが、下の方に書いている「二部会中心の今迄の在り方の中で、学会独自の運営をするに付いては…」とありますが、これと今話をされたことは関係している話ですか、それとも別の話ですか。

浦野 三十五年当時ですからね、私は直接には分からないのですけれども。

小川 なるほど。

東 記録を見てみると、研究誌をどうするかという問題がありました。

例えば大分大学に安部先生と言われる方がおられたのですが、学会誌を作るべきだという意見を言われているのですが、時期尚早ということで見送りになったということが書かれています。二部会では研究が進んでいるけれども、学会では研究が進んでいないという話があったのではないかと推測します。

小川 わかりました。

浦野 少し補足すると、規約の中に研究活動、講演会、展覧会開催と書いてあるのですが、そういうことが学会独自の事業として規約にあるのだけれど、当時は、今のように二部会と大学書道学会と日程を分けてやっていないんです。いっしょにやっていました。会は一日だけでした。

ほとんど同じメンバーなのでOBが何人かいるだけの会だからわざわざ二部会と学会を分けてやっていない。一日やって、二日目はだいたい観

光旅行をしていたのです。

東 観光旅行はメインだと書いてある号もありました。

浦野 そんなことがあって、規約に書いてあるのだけれど、学会はこれからどうするのだ、独自のことをやるのかという議論になったのだと思います。

石井 そうするとまず二部会をやって、その付け足しに研究発表が付いてくるということでしょうか。

浦野 そうそう、二部会としてそれぞれの教育学部の意見交換や情報交換があっただけで済んでいたのだけれど、それだけではちよっともったいないなということで、研究発表をする形を付け足していった。初期は、学会と二部会が分離していません。

石井 これ(『書学』)にも、観光地での集合写真が入っています。

五. 浦野先生が参加された最初の学会の印象について

東 それでは四番目の話題に入りたいと思います。浦野先生がご存じのなるべく古い時期の学会についてですが、今回のテーマも「初期の学会について」としていいこともあり、発足当時は分からないとしても、先生が参加された古い時代の大会についてどのような雰囲気であったかを知りたいのですが、今の観光の話も学会の一部の様子がわかるのですが、他に印象に残るようなことはありませんか。

浦野 第八回東京学芸大学昭和四十一年大会、私が最初に会場に入ったのが、この大会が初めてだったと思います。東京学芸大学の古い校舎の教室でやっていました。

石井 場所はまだ小金井ではなかったのですか。

浦野 小金井でした。校舎はまだ古い木造でした。

東 今の芸術館のところに書道科の建物があったのではないですか。

正門入って左にいったところですが。

浦野 一つの書道教室に全員集まって、全員集まっても四十名くらいしかいないので、この時も四十名もいなかったのではないのでしょうか。そのとき初めて部屋に入って、先生方が議論しているのを聞いたのです。そういうことをしたのは、この当時『書学』の編集を担当し、『書学』に毎年この学会・二部会の記事を集めて載せていた。その記事を準備する都合があるので、どんな風によっているのか、取材という形で行ったのです。

東 古い時期の研究発表を見てみると、タイトルが現在の書道研究というものだけでなく、教育に関するものもありますし、場合によっては教育制度みたいなものもあるのですが、その辺は分けなくて個人が考えていることを発表できるという場が長く続いたのでしょうか。

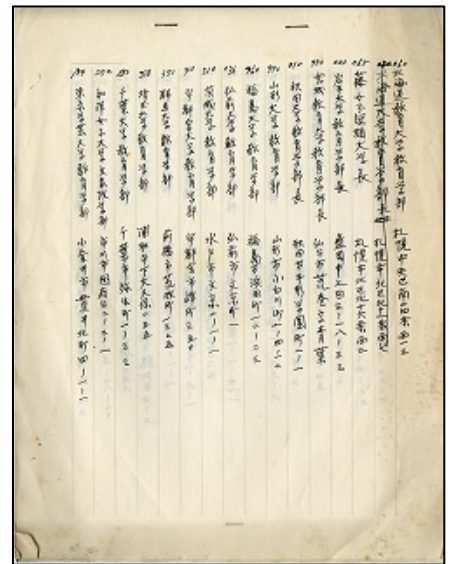
六. 会員増加のためにとった方策について

東 では次に、会員の増加のためにとった方策について、これは少し時代が下りまして、浦野先生が事務局になってからの話になります。実は今日、浦野先生の資料を持ってきているのですが、浦野先生のお父さんが書かれたものなのだそうです。会員の拡がりのために作られたものです。

浦野 それは何年だったかなあ。どっかに「何年」というメモがあればいいのかなあと思っっているのですが。

東 その当たり少しお話しだけませんか。

浦野 はい。竹影先生の突然の逝去で、事務局を引き受けて、翌年くらいから、二部会と学会の幹事会を、年に二回くらいやっていた。今の学会と似たような形で春と秋と二回やっていたのですが、そこへ事務局と



めたのです。その中の案内先だけをリストアップしたのが手書きのリストです。

石井 今、印刷された方の資料を見ると、後ろの方に新しくできた学校の名前が出てくるのですが、「昭和四十六年四月開校」というのが最新のものとして拾われているとするならば、昭和四十七年とか四十八年くらいのものでらうと推定できます。

浦野 その作業を三年くらい続けました。それで、新規入会者がぐんと増えてきて、それに伴って学会の名簿も整理して作るようになった。それまではきちんと印刷した名簿もなかった。国立の教員とOBだけだっ

して参加しはじめたのですけれど、先ほど触れた、会員の増加策、組織拡大の方策として、私学の教員に参加を呼びかけたらどうかということを経験会で提案して、みんながそれを承知してくれたので、私は事務局としてその作業をしました。この資料は、そのときの残りです。これが当時の全国の大学名鑑みたいな本を必要な頁だけを取り出して、書家の名簿等から教員養成とか文学部とかある私学に丸をつけていって、それに案内を送るということをやりは

たら、どこにだれがいるかはわかっているから、わざわざ作ることもなかったくらいなのです。

七. 学会誌と日本書道教育学会『書学』の関連性について

東 では続きまして六番目ですが、学会誌と『書学』と、先ほど中身は一緒と話をしましたけれども、浦野先生が取材をして写真を撮って、割り付けをして記事を組んでということをしていきましたが、それが一般的に見ると『書学』という一般の雑誌と学会の学会誌がなぜ同じものなのかということがちよつとわかりにくいのですが、その辺のところを先生の分かる範囲で教えていただければと思います。

浦野 はい。実は学会として会員数を増やすというのがある程度成功しました。会員が百名を超えて、百二十名、百五十名というようになっていきました。組織としては国立の教員よりも多くなった、そういう状況が生じてきました。もう一つは、学会としての研究発表も多くなってきて、二部会と学会を一日でこなすのが難しくなってきた。それで、二部会を始めにやっておいて、そのあと学会の研究発表を中心とした総会・研究発表会をやるようになっていった。都合二日がかりの総会になってゆく。

その中で、もう一つ私が意識していたのは、いわゆる学問の学会としての社会的な認知度を高め、しっかり基盤固めするには、日本学術会議に会員登録をしようと思ひ、それを目指したのです。日本学術会議は六本木にあるのですが、その事務局に行つて、学会の会員になるにはどうしたらいいかと聞いたら、これとこれとこの条件が必要だと言われました。必要な書類をもらつてきて、それを次の幹事会に示して、会員登録が実現できるようにしようということになったのです。会員登録を實現するために必要なのは、会員名簿と研究集録と予算決算の書類、それ

が過去三年分必要でした。それで名簿もきちんと印刷することにしました。予算決算の書類もちゃんと監事が印を押して総会で審議して決定するという形にしました。そしてもう一つ残ったのが研究論文集なのです。これが『書学』にこのような形で、つまり総会報告だけが主に掲載されていたのですけれど、それだけでは論文集にならないので、この『書学』の特集の中に、当日の発表論文も加えて、誰が何を発表したというリストも加えて、冊子を作ることにしたのです。それで『研究報告』という形を取った。そういうことです。

東 今もその名残はありますけれど。

浦野 それを『書学』に掲載しておいて、表紙を付け替えて、学会が独自に作っていますという形を整えて、総会の時に会員に配ると同時に、学術会議登録資料として用意していった。三年分ためて申請して登録された。東洋学研究部門に登録したのです。その作業を私がやったのですが、そういう経過で冊子ができたということです。

東 これを見ても、裏表紙に二松学舎大学と書かれています。

浦野 事務局ですね、その時の幹事長名で出ているはずですよ。

東 発行者は伊東先生です、昭和五十三年です。
浦野 学術会議に登録したのは、書道の団体ではこれがいちばん早いと思いますよ。六十年代に私が関わっているころまでは、東洋学関係研究連絡協議会に出席していたのですけれど、今、学会が学術会議に参加したということは、会員に意識がなくなつてしまつていゝのでは。

石井 もう当たり前というか当然のことというか、意識していいですよ。

浦野 同時に日本学術会議法が変わつて、昔のような体制ではないんですよ。昔は学術領域ごとに研究連絡協議会が組織されていて、全ての学会がどこかに所属して、そういう組織の上に学術会議の本体があるという形だったので。

八．学会の創設当時の幹部の先生方の印象について

東 それでは七番目です。皆様がご存じの鬼籍に入られている方、学会創設時の既に古参のベテランの先生がたですが、既に石橋先生のお名前等は出てきていますが、これらの先生の何か印象に残るようなことがあれば、どなたでもかまわないのですが、お教えいただければと思うのですが。例えば、田邊先生、石橋先生、先生と一緒に事務局をされているのであれば、二部会の続木先生、それから先生が事務局をやられていたときの伊東先生がいらっしやるのですが、どなたでもかまわないのですが、こういうような話があったということがあれば、お聞かせいただきたいのですが。

浦野 田邊（古邨）先生はあまり縁が深くはないのですが、学会発足時に中心になっていた先生です。個人的には『書学』で書論の連載記事を書いてもらっていたので、ご自宅へ何度か伺っています。

浦野 石橋犀水先生については、いちばん最初は新潟大学の教授だったという縁です。

石井 当時、新潟大学の教授陣は、石橋先生がいらっしやあって、竹内（沈鐘）先生がいらっしやあって、三浦（思雲）先生がいらっしやあって。

浦野 いやいや。石橋、竹内の二人だけ。石橋先生が退官されたあとに入ったのが三浦先生。ただ、三浦先生と石橋先生というのも、古い縁がありました。

浦野 私は三浦先生に指導を受け、卒業して一年したときに三浦先生から石橋先生が『書学』の編集者を捜している、どうかと言われて上京したのです。

小川 卒業されてから？

浦野 そうです。上京したのが三十九年、例の東京オリンピックの年で、

石橋先生のお宅のすぐ近くのアパートに住んでいた。石橋先生のお宅には毎朝行って、その日その日の打合せをして仕事をしていた。『書学』の編集というのは、石橋先生の編集方針でやるようなものでした。

東 記録を見ても、石橋先生が幹事長をおやりになっていたのは長いですね。十年ほど。

浦野 田邊先生は一年だけなのでですね。その後石橋先生になってずっと石橋先生が続けているのです。

東 会長職ができる前の体制ですから。

浦野 石橋先生が幹事長をして、教大協二部会の方を続木先生と伊東先生の二人でやっています。だから私は伊東先生からよく連絡をもらっていました。

東 これは浦野先生の保管書類の中から発見した毛筆の手紙です。

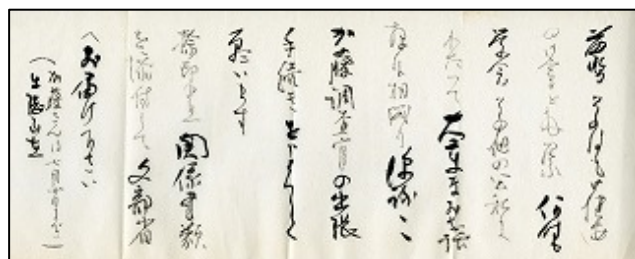
浦野 毛筆は珍しいですね。ペン書きが多いのだけれども。

東 私は全く読めませんけれども。発見しましたのでご覧ください。

石井 というと、年表のグリーンのあたりが、大書道学会を石橋先生がおやりになって、二部会の方を学芸大のコンビがやるという棲み分けのようなニュアンスなのでね。

浦野 そうです。それで、大書道学会の事務が私なんだけれども、教大協も同日にやって一緒にやる行事だから、最終的な雑用はみんな私のところにきていた。だから、名簿を作ったり、総会案内を作ったり、総会当日の進行表を作ったりというのは、みんな私がやっていた。

東 これは、昭和五十五年の資料ですけど、手書きの総会案内の原稿



昭和27年度 総合	
協議会と研究発表の申しせ	
【二部会 協議題目】 (1) 史 史教育	
1	教員養成大学学部における書道教育専攻の推進 (東京大 種村 雅彦)
2	大学院書道教育専攻設置の促進 (1) 117
特：大学院書道専攻に書道教育専攻の推進を促す	
1	1) 書道教育の推進 (新潟大 加藤 優一)
2	2) 大学院 問題 (中東大 大木 公)
3	3) 小学校教育への書道(書写)の位置づけ (千葉大 大木 公)
【学 会 協 議 題 目】	
1	1) 全書研について (徳島大 吉田 繁)
2	2) 全書研の拡大について (千葉大 大木 公)
3	3) 書道教育の推進について (千葉大 大木 公)
4	4) 高校における書道(書写)の位置づけ (徳島大 伊藤 利仁)
【研究発表】	
1	1) 書道と地字について 加藤 優一
2	2) 書道の源流について 神川 忠司
3	3) 書道教育の推進について 阿部 直秀
4	4) 中国書道漢字の筆法 大木 公
5	5) 中国書道と漢字の正誤 伊藤 利仁
6	6) 書道と地字の位置づけ 大木 公

この当時は手書きだったので。

小川 わからないことがあるのですが、『書学』がございませぬ、『書学』の性格、編集の方針というのと、これは中が抜き刷りのような形になって違和感なく入り込んでいますけれども、全然問題はなかったのでしょうか。石橋先生だったから問題はなく入り込めたという形なのですか。それとも組織的に問題はなかったのですか。

浦野 『書学』は石橋先生の財団、日本書道教育学会のいわば定期刊行物です。競書雑誌がいくつもあって、競書雑誌だけではつまらない、教育学会と称している以上、会らしい研究誌も出したという意味で『書学』を出していた。これは全く儲からない。それでも理事長石橋水先生の意志で発行していた。だから、全国大学書道学会あるいは教大協二部会というのは書道の学会として、位置付けられているから、その活動を雑誌に載せるというのは当然のこと、『書学』が発足した昭和三十三年から載せているのです。私が編集に関わるようになった昭和四十年ころからは、それを引き継いでいるだけなのです。その引き継ぎの時に、さきほど言ったような、学会らしく、学術団体らしくしてゆかためにこれも利用した。私は両方に関わっていたから、表紙を付け替えれば使えるように、『書学』本体の方を編集した。このことは、学会も了解した上で行ったものです。

石井 例えばこの七番のところにお名前が出てきて、田邊古邨、石橋犀

があります。綺麗に文字を書いておかないといけないなあというのが、今さらの印象です。二部会と学会と研究発表と浦野先生のメモがあります。自分が書いたものがどんな風に残っているか。因みに、

水、石橋先生は新潟大学から二松学舎大学へ、井上桂園先生は広島大学から安田女子大学に移られ長く教鞭を執られていた方です。よ、狩田義次(巻山)先生、現在の大阪教育大学(大阪学芸大学)です。浅見喜舟先生は千葉大、続木湖山・伊東寿先生は東京学芸大学。井上桂園先生と狩田巻山先生は、石橋先生の門下ではないけれども。浦野 狩田先生は門下ではない。井上桂園先生も門下ではない。井上先生は広島大。「桂」は、大原桂南の「桂」です。

石井 師匠筋に当たる人なのですか。

浦野 そうです。その流れを組んでいる人なのですから、井上桂園先生というのは、第五期の国定教科書の筆者で、広島に住んでいたけれど、教科書の執筆の時期は、だいたい三ヶ月から四ヶ月間くらい、東京の品川にあった旅館に住み込みのようになって執筆していた。

石井 缶詰めにされるのですか。

浦野 されたというよりも自分でしていたのだと思うけれど。

石井 そこまで文部省は面倒をみてくれないですね。

浦野 とにかく教科書の執筆に精力を傾けていたのです。石橋先生と井上先生というのは、どっかで気があったのだらうと思うのです。接した感じは全く違う人です。昭和十八、九年頃、戦争末期になつていますが、そのころの習字、書道教育の指導に関する理論的な著書は石橋先生が書いて、それに見合う実技としての手本を井上先生が書くという関係になつていた。

石井 最終的には、井上先生も書道教育学会に参加されていますが、一緒にやりになつていたのでしょうか。

浦野 財団法人日本書道教育学会は、石橋先生が会長で井上先生が副会長という期間が長く続きました。井上先生は広島に住んでいるけれど、年に数回は東京に来ていました。井上桂園先生の息子も石橋先生の中野の自宅のすぐそばに住んで、私のアパートの隣でした。私のアパートは、

井上先生の息子さんが紹介してくれたんだけど（笑）。

石井 久米先生のお師匠さんは井上桂園先生になるのですよね。

浦野 井上先生の耕心書道会で『耕心』という雑誌の編集をしていたのが久米先生。耕心書道会の中でも、広島大学の附属中学校に奉職していたという縁があつて、教育で一生懸命論文を書くようになっていく。千葉の高澤先生が退官の時に千葉に赴任しました。狩田巻山先生は、今の大阪教育大。当時大阪も分校だった。どこだったか忘れましたが。石井 池田か天王寺でしょうか。

東 天王寺かもしれません。

浦野 大阪学芸大には教授陣が分校ごとに行ったのだけれど、学会にいちばん積極的に参加して、仕事をしたのは狩田巻山先生。水嶋山耀先生とか杉岡華邨先生とか大阪教育大にいらつしやり、学会が関西であれば参加されていました。狩田先生は退官した後、東京に住まわれ、学会幹事長をされました。

東 二年ありますね、四十七年と四十八年です。

浦野 狩田先生は面白い人でした。意見ははっきりしていて、大阪で学会をやったときは、狩田先生と石橋先生が口げんかをしてたいへんだった。

小川 学会中のことですか。

浦野 学会の最中にね。二人で大声でやりあつてました。

東 『書学』の中にもイニシャルトークですが、白熱した議論がある記事を見ました。昔の学会は、意見をまるで教授会のように言い合うというのには普通にされていたのですか。

浦野 結構ありました。

東 主にもめたことというのは？ 書写の必修化でずいぶん意見があつたという記事を見ました。

浦野 大きいのは、書写の必修化と書道の大学院修士課程の設置、これ

が大きかった。かつては大学院に書道はなかった。美術と音楽はあるので書道でも何とかしようという議論が結構あつた。

石井 当時東京教育大学にもなかったのですか。

浦野 教育大にはあつたかもしれない。

東 上条(信山)先生が参加されていたということが記録にありますね。

浦野 上条先生は毎回ではないけれど参加されていました。

東 今井凌雪先生も参加されていた。

浦野 今井先生も参加されていました。浅見喜舟先生は千葉の大御所という形で。結局ここに並んでいる、田辺、石橋、井上、狩田、浅見先生まではみんな旧師範学校からずっと繋がっている人達なんです。伊東先生はわからない。続木先生は戦後でしょうか。

石井 いいえ。続木先生は第一師範、伊東先生が女子師範だったと思います。いずれにしても師範学校から皆さんスライドされたのだと思います。

浦野 続木先生は当時まだ若でした。あのメンバーだと。

石井 学芸大で書道科が発足した時に、多分大泉師範が田邊萬平先生、吉田繁先生で、当時吉田先生が助手で大学に採用されるのだと思います。当時六人いましたから、一番若かつたのだらうと思います。

浦野 首都圏にいて中央の幹事会に参加されていたのは、田邊先生は早くに辞められてしまったので、石橋、狩田、浅見、それと服部北蓮先生がよく出ていた。埼玉大です。服部先生は幹事長もやっていないようですね。

東 名前が抜けていました、すいません。服部先生はちよつと分からない。

小川 四十五年にクエスチョンで入っている。

石井 服部先生は石橋門下という捉え方でよろしいですか。

東 昨年度の埼玉大会で、服部先生の碑が大学内にあると話をされて

いましたね。

浦野 そうそう。もともと石橋先生とそれほど縁の深い人ではない。杉戸の神主さんです。お宅へ伺ったことがあるのだけれど、戦前の古い書道全集の編集をした野本白雲と縁がある人で、野本白雲や当時の書家の作品などがありました。北蓮というのは、北蓮沼という地名から取っているのです。杉戸町北蓮沼。高澤南総先生だって、南房総だから南総というのです。

石井 石橋犀水先生は。

浦野 自分の故郷、福岡県京都郡にある犀川。

東 昔の雅号ってそういうものですか(笑)。

石井 伊東参州先生も三河の出だから、参州というのでしょからね。

東 そういうものであることを初めて知りました。ありがとうございます。ありがとうございました。

九. 自由討論

東 では、今日せっかくお越しになって頂いている三人の若手の方に何かありましたら、お聞きしていただきたいのですが、いかがでしょうか。八番については、最後にしたいと思います。感想でも、質問でも一言お願いできればと思います。

徳泉先生



徳泉 ではすみません。二部会でも全国大学書道学会でもどちらにせよ、そもそも学会をみんなで作ろうという理由についてお聞きしたいのですが、第一回京都市大会の報告等を読むと、書道の研究および書道教育の振興につとめ、会員相互の親睦をはかるという目的が書いてあるのですが、みんなでやろうという機運や大きなき

っかけきたいなもの何かあったのですか。

浦野 うーん、そこは、まだ私がいなくてからね。三十四年は、私がまだ大学一年生だったのです。知らないですよ。でも何かあったのでしょうか。私の推測ですけど、その後関わっている中で感じたのは、OBを取り込んで組織を維持したいというのが根っこにあるなということです。当時、教育学部がある国立大学が四十数校、今だってそんなに変わっていないのだけれど、その内で全部書道教員がいるわけではなかった、非常勤講師しかいない大学もいくつあった。でもこんな規約を作って学会という名前を付けたのが、だんだん学会らしい活動をするきっかけにはなったのではないかと思います。

石井 発足当時の先生方は、当時の書家の素養として、作品が書けるとか臨書ができるのかは当然として、漢文が読めるということも素養としてあったのだと思うのですが、おそらく学術論文を書くということに関しては、大学の教員をされているのですけれども、ご自身はそういうトレーニングを受けてきたのではないし、そういう志向性がさほどあったわけではないですね、正直なところ。そのなかで学術研究を目指すという柱を立てることは結構勇気がいることなのかなと思うのですが、その辺に関しては、先生何か感想はお持ちですか。

浦野 それはやはり田邊先生と石橋先生の思考だと思えます。研究して著作を残そうというような意識を持っていたのは、ほとんどその二人です。その他、師範学校でやってきた先生が新制大学で、石井さんが言ったとおり、研究発表なんてしたことないというのが普通だった。論文を書くことなど意識したことないという人がほとんどでしたから、それを学会という名前を付けて研究発表を事業に入れたのは、田邊・石橋の二人だと思えます。始まった当時の学会の研究発表の実態を言うとおもしろいと思うけれど、毎年のように発表したが先生もおられました。

東 例えば、熊本大会では、服部北蓮先生が「近世庶民教育における

手習の目的、手習の順序、教材、手習用の筆、石橋犀水先生が「書美の形成原理」、これは今的ですね。奈良教育の乾鍵堂先生が「奈良学芸大学における特修書道科カリキュラムについて」。次の岩手大会ですが、山口野竹先生(北海道学芸大学)が「書の因子について」、吉丸竹軒先生(岩手大学)が「東臯の書」(澤田東臯)、神谷葵水先生(愛知学芸大学)が「顔書の再評価」。これも今風ですね、それから上原欣堂先生(富山大学)の「小野道風の書の日本の特質」というものがあります。題目もすっかりたてられた先生とそうではない先生、先ほど言いましたように教育のものと書道的なものと運営上のものと三つくらいに分かれますが、題目を見る限り全部が整合性をもってやっていたのではないという気がします。質問ありがとうございます。お二人はどうですか。



杉山先生

杉山 実際のところ、お話しに登場する方々が歴史上の人物という感じが私にはありまして、何とか分かっていこうとしているだけの感じなのですけれども、さきほど私学の方もいれてたくさん増やしていく、最初の方は分からないと先生おっしゃいましたけれども、私学の人もいれてさらに盛り上げるという機運、どうしてこういうものがあったのでしょうか。学会全体として、どうしていきたくてという目標があったのでしょうか。

浦野 それは、私はいわゆる学術団体としてレベルを上げようと考えていました。その方策としてまず一つは、メンバーを多くしていく必要があった。それと、研究発表の質を上げることだった。研究発表の質を上げる一つのきっかけとして学術団体として学術会議に登録しようと思ったのです。そういう方針については、ここに出たきたような古い先生はあまり意識がないのです。

杉山 では、ぶつかりがあったりしたのでしょうか。

浦野 事務局をやりながら、私は勝手にそっちに引っ張ったというのが実体かもしれません。

小川 それでは今、学術方面に考えがなかったという場合は、他の先生はどの方向に行こうと思っていたのかとかはありますか。

浦野 日々の授業に集中する。そこが本務だから。学会は半分懇親会なんです。

小川 この「会員相互の親睦」というのは本当だったのですか。

石井 そうすると、別に研究発表が行われても、それが確実に論文化されるという話ではないのですか。

浦野 ほとんどの国立の人は教授。助教授の人は少し。

石井 業績を積む必要はないといえなければいけません。

浦野 今のように研究業績を毎年報告するという仕組みもできていないから、日々の授業をちゃんとやっていたらそれでよかった。

石井 こういうふうに学術団体の方向にやってきた中心人物は浦野先生ですね。

浦野 まあ、私はそう思っているけれど。というのは、幹事会でそのような提案をして、雑用をやったのは私だから。

見城 そのお考えに賛同される方はどのくらいおられましたか。

浦野 賛同していたかどうかはわからない。

石井 誘導されていた。

見城 きつとよしやろうという人も…。

浦野 いや、もう一つは、増やす方策として、最初は私学の現職の教員をいっぱい入れたのだけれど、メンバーを見るとどうしても書壇で活躍したい思考の人が多し。だから会員にはなつたけれど学会に出てこない人が結構多いんですよ。これはまずいなあとあって、その次に打った手が、大学院ができてきたので、院生を準会員として入れようという方策です。

見城 その当時から大学院生を准会員としてというのがあったのですか。
浦野 そんなにすぐはできていない。大学院も徐々にできはじめている。

それはずっと後になる。

石井 大学院生としていちばん最初に研究発表された方はどなただったのですか。

浦野 誰だったかなあ。

東 多分、鈴木先生。鈴木慶子先生、続いて押木先生と松本先生。

石井 それは教育学会が分離する前ですか。

東 もちろん。



(訂正 鈴木慶子先生に確認したところ、大学

院生としての最も早い発表は、鈴木慶子先生(当時は千葉大学院生)と押木秀樹先生(当時・上越教育大学大学院生)ということが確認できました。

昭和六十一年に宮崎で開催された第一回全国大学書道教育学会での発表でした。本学会として最初の発表者は、二年後の昭和六十三年の奈良大会で発表された、橋本栄一先生(当時、東京学芸大学院生)、岡村浩先生(当時、新潟大学院生)、古川徹先生(当時、新潟大学院生)の三名でした。)

杉山 分離する前は、国語教育学会で発表していますよね。

東 別に学会の発表一覧を作っているのですけれど、それを見ると大学院生の会員登録を認めようとするのは、神奈川大会、昭和六十二年だと思えます。このくらいおのときに大学院生を入れようという議題が審議され、そのあと奈良大会がありますが、そこでの発表が大学院生の第一号だと思えます。

石井 教育学会が分離独立してゆくのが何年でしたか。

東 第一回大会が宮崎でしたが、今日は資料を持ってきていないので。

石井 今年三十周年大会が横浜で行われます。

浦野 昭和五十六年の千葉大会がきっかけなんです。

東 是非お教えください。

浦野 大学学会と教育学会が分かれるきっかけになったのは、千葉大会、昭和五十六年の大会です。幹事長が伊東先生で、開催校担当者が久米先生だった。

東 『研究報告』を見ると、実に充実した学会で、すごくよかったようです。久米先生が全力をあげて、海沿いの美術館でやった。

浦野 千葉県立美術館。総会の中で、伊東先生の発言が物議をかもしこくなるのです。

石井 その話は佐賀大会の時に久米先生とタクシーで一緒に一緒にいただいてうかがった記憶があります。

浦野 簡単に言うと、伊東先生は書論、書道史を中心として進めている大学書道学会と教育問題を切り離すべきだということでした。突然発言されたものだから、久米先生は面食らった。開催校として全体を一生懸命進めていたのに、それでも教育問題は大学書道学会で扱っていたし、もともとは教大協から発足しているのだから、教育問題は当然扱うものだと思っていた。ところが、大学書道学会の方の名前で研究発表が盛んになっていて、教育問題の扱いが疎外されるような発言が伊東先生からあったので、議論になった。

東 久米先生自身はかなり古くからご自分でも発表されていますよね。

浦野 そうです。

石井 そういう意味で、ある意味、伊東発言というのはそれまでの久米先生のやってきたことに対する否定にもつながりかねないという発言であつたということですよ。

東 伊東先生の一言で学会を二分するような形になってしまったということですね。

石井 それまでは大学書道学会の中で、いわゆる書学・書道史に関する研究、それと書写・書道教育に関する研究と教員養成に関する研究がそ

それぞれ行われていたということですね。

浦野 幹事会の中では、領域を少し分けて研究会場を分けようという意見もあった。研究発表の件数がだんだん増えてきて、少し昔のような雰囲気から研究発表もだんだん変わってきていたから、丁度そういう時期だった。

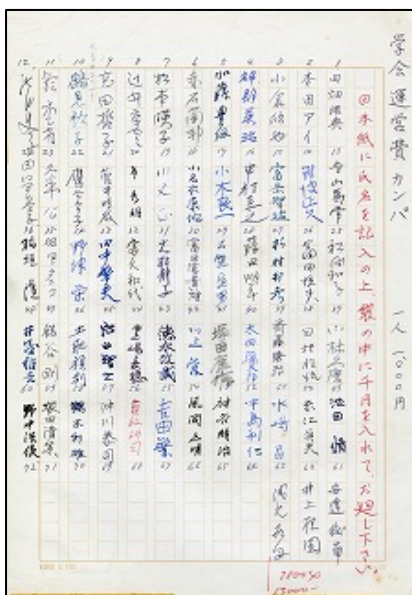
見城 浦野先生としては、結果的には現在までを考えた上では、分かれて良かったと感じていますか、結果として。

浦野 まあ、よかったと思う。それぞれにそれなりに続いているものね。ただ、当初は両方に所属しているのが普通だったのだけど、年数が経つとだんだん片方に所属する人が増えてきている。

石井 専門性の進化とともに棲み分けが。

浦野 その辺をこれからどうするかですね。今のうちに三つの学会がなくなつてやつていくだけいいのかという議論が多少出てくるでしょう。石井 それとまた現在が、設立当初と同じで、退職者が出た後の後任の補充がありませんから、全体傾向としてまた減っていくという時代にはなっているのでしょうか。

東 最後の手持ちの資料なのですが、皆様ご覧下さい。文字が上手い人がおられます。ある目的のためにカンパを、学会の総会開催中に袋を



回してお金を入れてもらったというものなのです。浦野先生、よろしければ、お話をお願いします。

浦野 このころ(注…昭和四十八年から五十年代)、主に学会としては会費で運営しているの

だけけれど、表に出ない書道教育振興のための色々な活動をするための資金を集める必要があり、総会の時にカンパしたのです。

小川 それはあらかじめぼしが付いている上での活動で集めたんですか、それともこれから始めようというものでしょうか。

浦野 実際に、全書研も含めて、東京の主な人達は手弁当で動いているわけで、そういう人を少し援助しようというものなのです。地方にいる人たちはできないでしょう。中央で一先懸命動いてくれている先生方に、少しでも応援しよう、そういう意味です。

十. 若い研究者へのメッセージ

東 先生、最後に大事なことなのですが、今日集まって頂いた方だけではなくて学会のみなさんへ、これから研究して行く若手の皆さんへメッセージがありましたら、お願いしたいと思います。

浦野 私としては、書道がいわゆる学問になるかというのが、そもそも(あるのです)。私自身書道科を卒業したけれど、よくわからなかった。

大学で書道を扱うのだったら、学問にならないといかんだろうと。これがそもそも始まりです。ただ本当にそれが、どれだけ要求されるのかなあとか、一人や二人そう思っても、社会全体はそう簡単には動かないなあ、という感想と両方がある。特に芸術分野に関しては、音楽や美術もそうだけど、芸術としての活動の方がメインであって、芸術学、あるいは書道であれば書学はその後を追っかけるようなものなのです。でも大学で取り扱う以上は、後付けでもそれらの体系をしっかりと位置付けることが、表現・鑑賞の芸の世界を拡げるための土台になるんじゃないかと思っている。いわゆる感性だけで芸を進めていると、個人個人の芸にはなっても、その国の文化全体としてのレベルアップにはなかなかならないんじゃないかと、そういうような気持ちがあるんですけど

どね。(学会の現状については) 結構、研究発表は形が整ってきているけれど、かなり個人個人が自分のやりたいことだけやって、言いつばなしという感じがする。学会が組織として力を持つには、その辺の基盤をみんなでどう考えているのかということをもっと盛んに議論があつていいのではと思う。

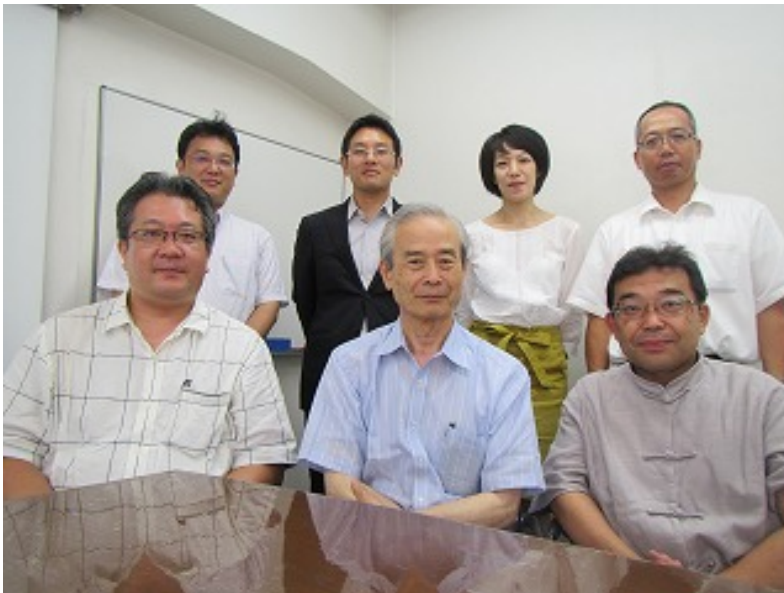
石井 例えば、教育学会の課題研究というのは、そういうことを意識したようなものでしょうか。

浦野 そう思いますけれど。

東 なかなかこういう機会も取りづらいので、是非おうかがいしたいと考えています。質問させて頂きました。

石井 実は先日、常任理事会だったのですけれども、奇しくも同じような作業をまたここでやる必要があるのではないかと話で横田理事長から出ました。大学の教員をしても事情があつて、書学書道史学会にも大学書道学会にも会員になっておられない方がいらつしやると思うので、その当たりの方を中心に、また少し勧誘のご案内を出したらどうかという話が出ました。過去にもそういう作業が行われていたんだなということが分かりました。

東 それでは丁度時間となりましたので、これでよろしければ閉じたいと思います。それでは、浦野先生、皆様今日ありがとうございます。



出席者

浦野 俊則先生

(植草学園大学学長)

小川 博章

(常任理事/淑徳大学)

石井 健

(常任理事/東京学芸大学)

見城 正訓

(理事/静岡大学)

杉山 勇人

(理事/鎌倉女子大学)

徳泉 さち

(会員/早稲田大学)

東 賢司

(理事/愛媛大学)